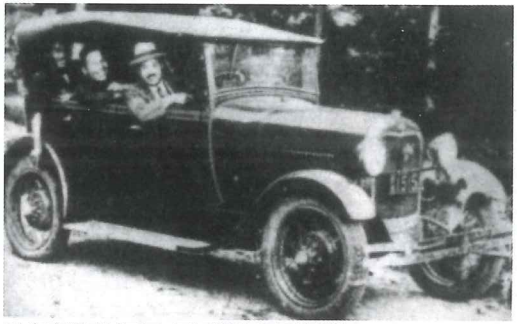
郷土館発
南と北を結ぶ

設楽町は、昔から南北を結ぶ街道沿いに町が発達しており、人の往来だけでなく物資の輸送にとっても重要な役割を果たしてきました。その街道にバスが登場し、その路線が延びていった様子を昭和二十年頃までについて紹介していきます。

大正八年

○東三自動車設立。大海～田口間・大海～本郷間開通。バス料金は大海～田口三円五十銭、大海～本郷四円五十銭、車両七台　（新城市誌）



乗合自動車（田口 原田清次郎氏提供）
「郷土したら」より

大正十一年

○金越～本郷間に七人乗りのホロ型自動車が朝夕二回運行されるようになった。（豊根村誌）

大正十四年

○尾三自動車：稲武～田口間にホロ付きのフォード車（定員八人）で一日二往復の運行を開始。「尾三」と書いた赤い旗を出しておけばどこにでも停車してくれた。　（設楽町誌）

○金越～坂場間路線延長　（豊根村誌）

○南信自動車：岡崎～根羽間五人乗りフォード車、長篠～根羽間六人乗りビッグ車が運行（この路線は昭和四年に定期運行を開始した）（根羽村誌）

大正十五年

○東三自動車：本郷～古戸～坂宇場～上津具線運行　（郷土館交通年表）

昭和元年

○東三自動車：川合～新野間開通・ホロ型四人乗り、晴天のみ運行　（阿南町誌）

昭和五年

【田口鉄道：海老～清崎間開通】

昭和七年

○**田口鉄道全通**　東三バス：田口～田口駅十一往復・田口～清崎六往復・田口～和市二往復・田口～津具二往復・川合～新野一往復・清崎～田峯二往復・清崎～長篠一往復　（したらの文化財9）

○金越～三河川合間のバス運賃は、一円五十銭。当時の大工の日当に相当する。　（豊根村誌）

昭和八年

○田口鉄道開通により東三バスが田口～新野間開通　所要時間三時間　（阿南町誌）

○東三自動車運輸バス：本郷～粟代間・本郷～長良（神田）間運行　（郷土館交通年表）

○金越～石堂間路線延長　（豊根村誌）

○資料によれば、下津具から田口鉄道の田口駅に達する道程は十二キロであった。乗合自動車については、清崎～下津具・上津具行きと根羽行きの定期路線バスがあって一日数回往復した。清崎駅は田口鉄道の発着駅であり、ここから各方面へバスが通じ、唯一の交通機関として利用された。　（津具村誌）

昭和九年

【堤石トンネル開通】

昭和十年

○本郷～下川～浦川間、本郷～中設楽～神田～田口間運行　（郷土館交通年表）

○根羽～田口間が一日一往復となる。　（根羽村誌）

これまで紹介した路線をつないでいくと、東西南北どこへでも『路線バスの旅』をすることができた、ということがわかります。その後、「昭和十二年頃には、バスの形状がホロ型から箱型にかわる。（豊根村誌）」のように形状が発達していくという様子も見られるのですが、「昭和十七年南信バス・東三バスは戦時中のため運行中止。（阿南町誌）」という状況となりました。

（奥三河郷土館長　渡邉　俊也）